

東北次世代がんプロ養成プラン セミナー実施報告書

(セミナー名称)	
東北大学大学院医学系研究科がん看護学分野主催 7月がん看護勉強会	
事例報告者 : 作山 佳菜子	
所属 : 東北大学大学院がん看護学分野	
テーマ : 副腎皮質癌に伴う意識障害を生じた患者の意思決定支援、 子供への介入の検討	
担当者氏名 : 佐藤 富美子 教授	所属 : 東北大学大学院がん看護学分野
内線 : 7926	Email: fsato@med.tohoku.ac.jp
1. 実施年月日 :	
令和 元年 7月 29日	
2. 開催場所 :	
東北大学医学部保健学科D棟 217号室 がん看護学分野カンファレンス室	
3. 関連分野 :	
がん看護、意思決定支援、子ども支援	
4. 対象者 :	
がん看護に興味関心のある医療関係者・大学教員・東北大学大学院医学系研究科保健学 専攻学生・東北大学医学部保健学科学生	
5. 参加人数 : (お分かりの範囲で内訳をお知らせください。教員、学生など)	
大学教員 3名、大学院生 5名、学部学生 1名 計 9名	
6. 成果 :	
<p>今回の事例報告は、55歳女性、副腎皮質癌、多発肺肝リンパ節転移があり、意思決定能力が低下している患者の治療方針決定に関する支援について検討を行った。</p> <p>事例は、専業主婦であり、夫(57歳)・長男(28歳)・長女(16歳)と同居していた。</p> <p>報告者が受け持つまでの経過を以下に示す。患者は、腰痛自覚により受診し、高血圧と診断された。その2ヶ月後より顔面・下肢浮腫を自覚し、翌月には歩行困難な状況であり、近医受診したが、明確な診断は得られなかった。長女と親戚の家で療養中に異常言動がみられ、A病院へ緊急搬送された。幻覚や不穏により、点滴自己抜去や攻撃的な様子から抑制され過ぎしていた。原発不明癌の診断にて、B病院に転院となった。転院後、精神症状はステロイド精神病が原因と考えられ、副腎皮質ホルモン合成阻害剤により、症状の改善がみられたが、意識レベルに日内変動がみられていた。受け持ち開始となり、報告者が課題と考えた点は2点であった。1点目は、患者は治療を望んでおらず、さらに意思決定能力がないと判断されて、夫と医師に推奨された治療が遂行された点である。2点目は、子供への看護介入ができなかったことである。</p> <p>以上の報告を基に、この2点に対する倫理的課題と看護援助についてディスカッションを行った。ディスカッションをもとに明確になった報告を受けた事例の1点目の課題は、医師や夫は善行の原則や無危害の原則に沿って治療遂行したが、患者の希望を汲み取った治療方針の決定ではなく自律尊重の原則が脅かされている点であった。この倫理的課題では、治療効果と予後を検討し、患者の代理意志決定者が患者の意向を検討した上での意思決定できるような看護師の関わりの必要性や、患者の意向を汲み取った場合に安心して退院できるような調整を実施していく必要を共有した。2点目は、夫が子供に患者の状況を説明しているかについて確認はしていたが、積極的な介入ができず子供や夫の後悔が生じていなかったか不明である点である。この点については、夫自身が混乱の中、夫を支える存在がいたのか、さらには子供自身がどのように患者のことを思いながら生活を送ってい</p>	

るのかなど、伝えることの重要性を夫に伝えるだけでなく、夫が伝えられるような手段や伝えた後の夫と子供に対するフォローアップ体制の整備を積極的に行っていく支援の重要性が話し合われた。以上を参加者で共有した。来月は、引き続き子供（孫）への告知に難渋している事例について検討していく予定である。

【当日の会場の様子などの写真がございましたら、添付ください】

